

「三度目の卒都婆小町に寄せて」

武田志房

本日は、ご多用のところ、又、コロナ禍の終息も未だ見えない中で、第四十八回花影会にお運び頂き衷心より御礼申し上げます。

今回、私は三度目の卒都婆小町を勤めます。御宗家には恋重荷の舞囃子、野村四郎先輩に龍田を移神楽の小書(特殊演出)付の舞囃子でお願い申し上げ、狂言は野村萬氏に、ご尊父万蔵先生が好んで居られた富士松をお願い致しました。

私が卒都婆小町を披かせて頂きましたのは、平成三年十一月二十三日です。この催しは、祖父宗治郎五十回忌、叔父岡久雄十七回忌、父太加志七回忌の二日間にわたる追善能の初日でした。主催は宗治郎の孫達(弟宗和、従兄弟一噌庸二・岡久廣・武田尚浩、私)の五人で致しました。

父はこの曲を宗治郎十三回忌追善能の折、四十九才の時に、御分家観世華雪先生のお勧めにより、先代御宗家のお許しを得、披かせて頂きました。私も平成三年は四十九才の年にあたる故、恩師観世左近元正先生にお許しを願ひ出しました。この時、諸先輩の中で関根祥六氏の披きは決まっていたが、野村四郎氏を始め、七、八名の方々の披ぎが決まっておらず、不安もありましたが、先生から「こういう曲はチャンスが無いと披けないから」と、お許し下さいました。その翌年にあたる平成二年八月、先生が急逝され、その後どの様に生きて行けば良いのかと、途方に暮れたことを思い出し、ます。卒都婆小町に関しては、昭和六十二年、父の三回忌の追善能で、門下準職分黒田紗都美に披かせた折、先生のお稽古を受けておりましたので、自らの努力のみと思ひ切ること致しました。

二度目は平成十九年三月、父の二十三回忌追善能の折、一度之次第の小書付で勤めました。

三度目となる今回は、息子達の勧めにより勤めることと致しましたが、かなりの迷いがありました。父が昭和六十年十月の名古屋観世会別会で、この曲を勤める事が決っておりましたが、その五月に発病し、胆管癌との診断で、主治医からは「今後也能を舞いたいならば手術は必須、静かに余生を送るならば手術は不要」と宣告され、父は手術を受けることを了承し、六月に行われました。手術は成功し回復を待つばかりと思われた矢先の七月十七日深夜、父は睡眠中に舌根陥没による急性呼吸不全となり急逝致しました。このことが心にかかり決めかねておりましたが、父の年令も超え、父が勤めていない木賊、鸚鵡小町も披かせて頂きましたので、三度目の卒都婆小町を勤めることと致しました。老骨に鞭を打ち、懸命に勤めますので、終曲まで御鑑賞賜れば幸甚に存じます。

公演に先立ちまして、十二時より約一時間、弟宗和と高桑いづみ氏に対談をお願い致しましたので、是非お楽しみください。

※岡久雄：宗治郎の長女の夫 ※一噌庸二：庸二の父 鉄二は太加志の弟で、一噌又六郎の養子

解説

(たつた うつりがぐら・こいのおもに)

舞囃子

龍田移神楽・恋重荷

能は、謡や舞、囃子、面・装束といった様々な要素が組み上がり、それらがアンサンブルを奏でることと完成する、一つの総合芸術です。言葉や身体、音楽によって物語世界をどう表現するか。どういう表情の能面を使い、どのような色・素材・デザインの装束を用いるか…。そういった、舞台を構成する要素の一つ一つが、能の作品を成り立たせるための重要なパーツとなっているのです。

ならば、その個々のパーツを支えている技術――謡の表現力、身体の技法、囃子事の工夫といった、一つ一つの要素がもつ「素」の魅力にも、目を向けたいのが人心でしょう。そうした要求に応える形で演じられるのが、本日御覧頂く【舞囃子】などの上演形態です。

【舞囃子】とは、能の作品の中核となる場面を、紋付袴の姿のままで、謡と囃子に合わせて舞うというもの。役の性格を視覚的に明示する面や装束をあえて用いず、「素」の姿のまま演じること、謡や囃子を引き受けて舞う演者の姿をクローズアップし、能の根幹を支える身体表現そのものを鑑賞して頂くという上演形態です。

本公演では、《龍田》《恋重荷》という二つの能の作品から、それぞれの中核となる場面を御覧頂きます。

◆《龍田 移神楽》

《龍田》は、秋を司る神として名高い龍田明神の神徳を描いた作品です。旅の僧侶たちの前に現れた明神は、古来より歌人たちに愛されてきた龍田の里の致景を讃えます。冬の訪れを迎え、川面の氷に閉じ込められた紅葉の色。それは、過ぎ去ってしまった秋の記憶を閉じ込める、追憶の美の姿だったのです。季節の移ろいに感興を催した明神は、冴えわたる月光の下、吹き乱れゆく紅葉のなかで神楽を舞いはじめる

〔出演者のご紹介〕



撮影：前島吉裕

たけだ ゆきふさ

武田志房（重要無形文化財総合指定保持者）

昭和17年2月10日生まれ。故・武田太加志の長男。父及び二十五世観世宗家観世左近に師事。昭和23年、仕舞「合浦」の初舞台以降、軌道70年にわたり観世流の重習(おもならい)の殆どを開曲し、平成29年11月に能の最奥曲といえる「関寺小町」を抜き、文化庁芸術祭賞を受賞。平成24年旭日雙光章を受賞。平成28年11月、長男友志と共に、武田太加志記念能楽振興財団を設立。一般社団法人観世会顧問、公益財団法人武田太加志記念能楽振興財団評議員。



撮影：前島吉裕

たけだ むねかず

武田宗和（重要無形文化財総合指定保持者）

昭和23年9月2日生まれ。故・武田太加志の次男。父及び二十五世観世宗家観世左近に師事。昭和27年『鞍馬天狗』花見にて初舞台。昭和31年『俊成忠度』にて初シテ。現在までに『翁』『砧』『卒都婆小町』『鸚鵡小町』『姨捨』など重習曲を数多く勤める。またインド・フランス・アルジェリア等、海外公演に多数参加。令和元年旭日雙光章を受賞。公益社団法人能楽協会常務理事、一般社団法人観世会常務理事、公益財団法人武田太加志記念能楽振興財団評議員。

たかくわ

高桑いづみ

能の音楽・演出について研究をおこない、NHK「日本の伝統芸能入門」「FM能楽堂」などの解説もつとめる。東京藝術大学大学院音楽研究科修了。独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所無形文化財研究室長を経て現在特任研究員。著書に『能の囃子と演出』『能・狂言 謡の変遷』など。第21回東洋音楽学会田邊尚雄賞・第35回観世寿夫記念法政大学能楽賞受賞。

のでした。

本日は、明神が神楽を舞う場面を御覧頂きます。なお、今回は「移神楽」という特別演出が付与され、舞が通常とは異なる形となります。通常であれば、三楽章(「三段」)からなる(「神楽」)に続いて二楽章の(「神舞」)が舞われ、颯爽とした神の姿が表現されますが、今回は後半の(「神舞」)が無く、(「神楽」)が五楽章分たっぷりと舞われます。等拍に刻まれる小鼓の音、うきうきとした独特の旋律を奏でる笛の調べの中で、感興を催した神の姿がいつそう印象づけられる演出です。

◆《恋重荷》

《恋重荷》は、身分違いの恋の悲劇を描いた作品です。院の御所に仕える庭掃きの老人・山科莊司は、ある日、女御の姿を垣間見て思慕の念を抱きました。彼を諦めさせるべく、重荷を持てとの難題を出した女御。莊司は持ち上がらぬ重荷に絶望し、失意のあまり絶命してしまします。やがて、亡霊となって現れた莊司。彼は女御に恨み言を述べ、自らの苦しみを味わわせようと責め苛みます。しかしそうするうち、復讐を遂げてなお満たされぬ思いに気づき、愛しい人を慕う心を出した彼は、最後には彼女を守護する神となって消えてゆくのです。

本日は、莊司の亡霊が女御を責め苛み、神となって消えてゆくまでを御覧頂きます。

狂言

(ふじまつ)

富士松

名高い富士の松を手に入れた太郎冠者。主人はそれを横取りしようとして、彼に連歌の相手を命じます。次から次へと難句を繰り出し、句を付けられなければ松をよこせと言う主人。しかし、さすがはこの横暴な主人に仕えるだけあって、太郎冠者も一筋縄ではゆかぬ者。彼は機知に富んだ付句の数々によって、繰り出される難題を次々と解決して

しまうのでした――。狂言《富士松》が描くのは、そんな主人と太郎冠者との駆け引きと、その中で見せる太郎冠者の頓才の妙味です。

本作に登場する「連歌」とは、室町時代に広く親しまれていた、複数の人が集まって五七五の句と七七の句とを交互に詠んでゆくという遊びです。前の人の五七五と自分の七七とが組み合わせれば一首の和歌が成立し、しかも自分の七七と次の人の五七五とが組み合わせると、今度は別の和歌が完成する……という、次から次へと目まぐるしく変化してゆく文芸世界を楽しむもので、そうした、次々に変化する世界の生き生きとしたテンポと息遣いは、本作における主人と太郎冠者との駆け引きにも通じるものがあります。本作に登場する句の数々は、連歌の中でも「俳諧連歌」という、滑稽味と機知の面白さを重視するジャンルに属するものでした。いわば本作では、太郎冠者という人物のもつ機知と軽妙さが、人物表現と句の内容との相乗効果によって印象づけられていると言えましょう。

威圧しようとする主人をものともせず、次々に難題を解決してゆく太郎冠者。そんな彼の巧みな付句の数々からは、能・狂言が成立した室町時代の人々の、生きた息づかいが聞こえてくるようです。

能

卒都婆小町 一度之次第

(そとわこまち いちどのしだい)

足元も覚束なく、息も絶えだえに、竹の杖にすがって歩いてきた一人の老女。百歳に余って零落し、頭は霜の置いた蓬の如く、首には垢まみれの袋をぶら下げている――。能《卒都婆小町》が描くのは、そんな小野小町の姿でした。

小野小町といえば、平安朝の名高い歌人であり、絶世の美女として知られる人物。しかし中世になると、そうした美女のイメージと表裏一体の形で、へ小町は年老いて零落し、悲惨な老後を送った」とする伝説が語られるようになります。本作は、そんな中世の小町伝説に基づく作品です。

らしい姿で、極貧に喘ぎながら、老先短い命を生きている……。そんな自らの一生を語り、僧に救済を願う老女の嘆きが、この『壮衰書』には描かれています。

本作は、この『壮衰書』を踏まえつつも、老女の人物造形の上でかなりの改変が加えられていることに気づきます。多くの好条件の男たちから求婚を受けた『壮衰書』の女が結局それを選ばなかったのは、ひとえに親兄弟の意思によるもので、彼女は自らの人生を自分では選べませんでした。周囲の意見に左右され運命に翻弄された、非力な女の哀れな生涯。それが、『壮衰書』の描く世界なのです。しかし本作では、小町は自らの意思によって男たちの求婚を拒み、美貌ゆえの驕慢によって彼らの心を弄びました。そしてその報いによって、年老いた今、彼女は苦しみの日々を送っている……。本作に描かれたのは、そんな因果応報の物語でした。

さらに、一心に仏道を願って極楽往生を夢見た『壮衰書』の老女と異なり、本作の老女小町はしたたかです。聖なる卒都婆を尻に敷き、「姿が世をも厭はばこそ(姿を変えて出家した程度で、世を厭うたと言えるのか)」と言い放ち、仏道に燃える僧たちを言い負かしてしまう小町の老獪さは、本作の大きな魅力といえます。老い衰えて物乞いの身となり、しかもかつて弄んでいた男の一人・深草少将に取り憑かれて狂気となるほどの過去の報いを受けながら、それにも関わらず、彼女は仏を敬おうともせず、太々しい態度を取りつつづけるのです。

しかし、それは逆に、彼女の心の弱さなのかもしれません。本作では、小町は老いに衰えたわが身を恥じ、人目を避けようと必死で足掻いています。そんなへ老いの身を恥じる老女」という人物造形は『壮衰書』には見えないもので、本作のオリジナル要素と言って良いでしょう。過去の美貌に執着しつづけ、老い衰えた今の現実を受け入れられない小町。深草少将の霊を呼び寄せてしまったのも、そんな小町自身の執心のなせる業でした。その過去に囚われた心ゆえに、仏道に対して素直に向きあうことができず、僧を論破するほどの智慧を持ちながら、も苦の根源である慢心を抑えられない……。小町の不遜な振舞いは、そ

この能は、もとは世阿弥の父・観阿弥の手になる長大な作品であり、それを世阿弥が短縮して現在の形になったと伝えられています(申楽談儀)。観阿弥周辺で成立した作品には、宗教者の文章を転用した曲舞《白鬚》《江口遊女》のように、当時の宗教界と深い関係を有しながら制作されたものが多く、本作もそうした環境の中で成立したものと考えられます。

本作の成立を考える上で重要な文学作品に、平安期に成立した『玉造小町子壮衰書』があります。『壮衰書』は、へ若い頃は美貌に満ちていた女が、老いるに従って次第に零落してしまった」という無常の物語を描いた作品で、僧侶または仏教に帰依した文人の作と推定されています。そして中世には、この女主人公は小野小町であると理解されるようになり、上述の小町伝説が形成してゆく上で極めて大きな役割を果たしたのでした。

本作では、シテの登場場面や正体判明の場面において、難しい漢語的な表現を列挙しながら老女の身の零落が謡われていますが、これらの文句はほとんどが『壮衰書』からの引用であり、本作の成立にあたっては『壮衰書』が直接参照されたと考えられます。本作は、この『壮衰書』に描かれた老いの身の悲哀を軸に、そこに「極楽の内ならばこそ……」の歌の機知や能《通小町》に見える深草少将の故事を取り合わせて構成されたものと言えましょう。

『壮衰書』は、街道をゆく僧の前に現れた一人の老女が自らの生涯を語り、仏道を願うという内容です。裕福な家庭に育って贅の限りを尽くし、美貌に満ちていた若い頃。主君や富豪をはじめ多くの人々が求婚するも、両親や兄弟は彼女を王妃にしようと思い、これを許しませんでした。ところがその親兄弟は突然の死を迎え、彼女の人生は暗転します。仕えていた使用人たちは去ってゆき、家は荒れ果て、彼女は次第に困窮してゆきました。ようやく獵師の男と結婚したものの、その夫からは暴力を振るわれ、生活は貧しく、そんな中で赤ん坊の養育に追われる日々。やがてその夫や子供にも先立たれ、いま、衰え果てた汚な

んな葛藤の裏返しでもあったのです。

小町の心の中に渦巻く、“過去”と“現在”への様々な思い。本作において『壮衰書』のようなへ次第に衰えゆく様子を描かず、へ栄華の絶頂にいた若き日」とへ没落しきった現在」の両極だけが描き出されているのも、その落差によって彼女の執心を浮き彫りにしようとする、残酷なまでの演出だったのです。

因果応報の罪の報いを受けながら、なお驕慢の心を捨てきれず、過去への執心に囚われつつづける小町。そんなへしたたかさの裏にある人間の心の弱さ」を、能《卒都婆小町》は見つめさせてくれています。

【さらに知りたい人のために―主要参考文献―】

◆《富士松》橋本朝生「狂言と俳諧連歌」(《中世史劇としての狂言》若草書房、一九九七年。初出一九九七年)

◆《卒都婆小町》：片桐洋二「新装版 小野小町追跡」(笠間書院、二〇一五年。初版一九七五年)、伊藤正義「作品研究《卒都婆小町》」(《伊藤正義中世文華論集》一、和泉書院、二〇一二年。初出一九八二年)、竹本幹夫「観阿弥時代の能」(《観阿弥・世阿弥時代の能楽》明治書院、一九九九年。初出一九八三年)、伊藤正義「各曲解題 卒都婆小町」(《新潮日本古典集成 謡曲集》中、新潮社、一九八六年)、三宅晶子「世阿弥の物まね論 通小町と卒都婆小町」(《歌舞能の確立と展開》ベリカン社、二〇〇一年。初出一九九三年)、枅尾武「玉造小町子壮衰書」(岩波文庫、一九九四年)、小林健二「弘法大師小野小町教化説話と能《卒都婆小町》」(《中世劇文学の研究》三弥井書店、二〇〇一年。初出一九九四年)

本稿はJSPS科研費JP20K21997に基づく成果の一部である。

なかのあきま

中野顕正・日本女子大学学術研究員